

大正期におけるレオナルド・ダ・ヴィンチの受容の一側面

—甲斐庄楠音を中心に—

富田 真理子 (東京外国語大学)

大正期、女性の表現そして日本画の表現の限界に挑戦した画家の一人として甲斐庄楠音^{かいのしょうただおと}をあげることができる。「デロリ」という形容の相応しい女性像を多く描いた楠音は一時期極端に西洋絵画に傾倒する。その際に拠り所として選択した画家の一人がレオナルド・ダ・ヴィンチであった。このルネサンス期の画家に夢中になった楠音は大正9(1920)年を中心にレオナルドの影響を顕著に受けた女性像を制作する。

大正期、美術雑誌や文芸雑誌ではレオナルドが数多く取り上げられるようになり、特に『白樺』においてはそれまで紹介されてこなかった素描などが積極的に掲載されていた。先行研究においては大正期のレオナルド像として、両性具有的なイメージを描いたデカダンな画家という認識が紹介されている。しかし、豊富になった洋書の輸入などに伴いその認識は多様化していったと考えられ、レオナルドの言葉などを通じてレオナルド自身へと迫ろうとする見方が出てきた時期でもあった。楠音におけるレオナルドの影響はこれまでレオナルドの受容史とは個別にしか検討されてこなかったが、本発表においてはレオナルドの捉え方の変化の中に楠音を位置づけ、画家が制作にあたり何を選択したのかという観点から検討する。

楠音がレオナルドの影響を受けて制作した日本画として《島原の女(京の女)》(個人蔵)を指摘する。絹本に描かれた日本画であるにもかかわらず油絵のように見える立体表現においても、また図像の引用においてもレオナルドの顕著な影響を見て取ることができる。先行研究においては《聖アンナと聖母子》(ルーヴル美術館)からの影響が指摘されている。今回、レオナルドの習作である《聖アンナと聖母子、幼児聖ヨハネ》(ロンドン、ナショナル・ギャラリー)の複製画を楠音が所有していたことが判明したので、この作品の影響も指摘する。描かれた手の形も当時の日本画としては特徴的であり、ウィンザー手稿などにみられるレオナルドの素描と通じるものである。楠音はレオナルドの素描集を所有していたと言われているが、洋書輸入の窓口であった丸善のカタログ『學鐙』の調査から、当時入手できた洋書で楠音が参照した可能性のあるものを指摘したい。

また楠音が大きく影響を受けた画家に、村上華岳がいる。華岳は自身の画論のなかでレオナルドについて言及しており、大正9年の《裸婦図》(山種美術館)はレオナルドの影響を受けているとも指摘されている。楠音と華岳とを比較すると、華岳は技法的にはあくまでも自らのものを用いる、いわば消極的な受容であると言えるのに対し、楠音の制作はレオナルド的な雰囲気や作品に盛り込むことにとどまらず、あたかもレオナルドのように描くことを志向したと考えられる。これは、レオナルドという画家個人へと迫ろうとした『白樺』を始めとする大正期のレオナルド観の中でこそ生まれてきたものであると結論づける。